

# 「土浦の里」が「日本のふるさと」に化けるまで

—“MEMORIES OF SILK AND STRAW”の邦題—

佐賀 純一

土浦の里の英訳版がアメリカなどでなかなかの評判になっているのはほんとうにうれしいことである。ことに最近の円高で、外国での出版事業がだいぶ困難になっている時期に好調な売行きを示しているということはなんとも有難い。それというのは、この本が生まれるまでには随分と生みの苦しみがあったのだし、同時に流産の恐れも多分にあったからで、それも今となってみるとなつかしい気もするのだが、ほんの半年前までは気苦労だけでもなかなか容易ではなかったのだ。土浦の里とその英訳版の間には細い一本の紐があるのだが、その紐はいつきれてもおかしくないし、途中でとんでもない障害物にまきついて取れなくなってしまったとしてもひとつも不思議ではなかったのだ。ここまでなんとかたどりつけたというのは、多くの友人と度重なる好運のおかげである。

翻訳者のガリー・エバンスは僕のためにまるまる四年あまり浪人をした。これはたいへんなことである。彼はこの本の翻訳が自分の人生にとって重要な意味を持つに違いないと信じたからそうしたのだが、彼は翻訳中に父親を失い、日本の女性と神式で結婚式を挙げ、僕が親代りをつとめたのだから、この間の出来事だけをとりとめても、彼にはいくつもの人生の重大事がかさなったのだ。彼は始めの一年間はロンドンで仕事を進めていたが、なかなか計画どおりに行かないので、とうとう政府留学生の試験を受けて京都大学の経済学部修士生になった。もともと彼はケンブリッ

ジ大学の日本語科の出身で経済学の分野には門外漢であったのだが、彼は翻訳が終わったらライター通信に入りたいという希望があり、そのためには世界の経済に通じていた方がいいというわけでその分野の修士生になったというわけである。従って彼の生活は大半が翻訳に費やされ、残りの時間が経済学の勉強にあてられた。京都は少し不便ではあったが、ロンドンと比較すれば雲泥の差があるから、仕事は大いにはかどった。こうして翻訳がどんどんたまっていったのだが、さて出来上がったものを出版してくれそうなところがどうしても見つからない。いざとなったら自費出版でも仕方がないと考えてはいたが、出来たものをどうやって売ると考えると憂鬱になる。日本語版を買ってくれた人々のなかには義理で購入してくれるひともいるだろうが、それもたかがしれているだろう。だいいち英訳は欧米人に読んでもらってはじめて意味がある。田舎の町の自費出版では全く無意味だし、浪人して翻訳に没頭してくれたガリーにも義理が立たない。

困惑していたところへイギリス大使館から助け船が来た。もっともこの助け船を出すように要請してくれたのは当時フジテレビの役員をしていて、現在はサンケイ新聞の論説員として活躍している土井泰彦さんである。土井さんと知り会ったのは市内の小松に住んでいる広瀬夫妻の紹介なのだから話は少々回りくどくなるのだが、これは重要なことだから書き残しておく必要がある。

広瀬一彦氏は拓殖大学の国際経済学教授で、イギリスに住んでいた時分に土井さんと親しくつき合っていたという。帰国してから一人息子を聖母幼稚園に通わせたが、僕の娘もそこに通っていた。僕はガリーと知り合うまでに随分翻訳者を探すのに苦労をして、広瀬さんも一緒になって探してくれたのだが、なかなかまい人物と出くわさない。中には翻訳料として数千万円を要求するような人もいて、これは諦めなければならぬのかなと考えてたときに、優秀な青年が是非この仕事をやってみてみたいといっているが、会って見ないかと話を持ってきてくれたのが、土井さんだった。土井さんは広瀬さんから翻訳者がいたらたのむとかねてから頼まれていたのだ。

ガリーとの出会いの様子はここでは省略するが、こんなふうにしてようやく翻訳が進んできてみると、これが完成したときにどうするのかという問題が現実のものとなってきて、どうにも僕は困り果てたのだ。こんな僕を見て、土井さんや広瀬さんは内心、ほんとに困った人だと考えていただろう。出版のあてもなくて仕事だけどんどん進めてしまっ、そのあとの始末はなにも現実的な計画がないのだから、実に無鉄砲というか、無思慮というか、どうしようもない。

土井さんはそこで一計を案じて、知人のイギリス大使館、一等書記官のピネル氏にプリントアウトした翻訳文を送って見てもらったのである。面白いものであれば出版に協力してくれるだろうと、土井さんは期待したのだ。そして、実に幸運なことには、ピネル氏は大いに乗り気になってくれた。彼は大使館員たちにこの翻訳を回し読みさせ、彼らの反応を見てみようとした。そしてこの試みは全く成功だった。全員が、「面白い、是非本にしてもらいたい。本になったらすぐにでも買いたい」と答えてきたのである。これはなかなか

かの内容であることに間違いはないと、書記官は確信を持った。

土井さん、ピネル氏、そしてガリーと僕が講談社インターナショナルの編集室を訪ねたのはもう三年も前のことだが、いまでもはっきり覚えている。

髭をはやした、少し猫背の怖い顔をしたイギリス人が僕たちの前に座って長い間原稿を見ていた。僕にはこの人物がどのような資格の人なのかそのときは全く分からなかったのだが、実は彼はスチーブン・ショウというエディターであり、この道では世界的に評価されている人物だったのである。彼はこれまで源氏物語をはじめとして川端康成、井伏鱒二、井上靖、太宰治、吉川英治など、そうそうたる人々の翻訳文を扱ってきた。つまり、この日本の主要な文学の翻訳の多くはこの人物を通過して外国に出て行ったのだ。しかし僕はまったくそんなことは知らなかったので、むずかしそうな人だなという印象しか持たなかった。

「いいですね。」彼は顔を上げて低い声でいった。「これは面白い本になると思います。こんなものをいつかやりたいと思ってました。」

ピネルさんはショウさんと握手をした。

土井さんたちと分かれてから僕とガリーは電車にも乗らず長い間歩いた。

「あの人は、やろうと言ったのだから、きっと本になるのだろうな。」

「そうだろうと思うね。」

われわれは当惑していたのだ。ショウという人物の言葉と表情が矛盾しているような気がして不安だったのだ。

二人は簡単な食事をして、嬉しいのかどうかもわからずじまいのまま分かれたのだった。

それから二年余りの間、ショウさんとガリー、僕の格闘が続いた。それがどんなものであったのかを説明するのには、赤線だらけの

コピーを見てもらう必要がある。しかしほんとうの苦労は編集の仕事よりも、果して、本が出るのか出ないのかということが最後まで決定しなかったことなのだ。

そもそも英訳をするのはこちらの勝手で、誰でもやろうと思えば出来ないことではない。しかし出版したものが売れるかどうかということはこちらの意志ではどうにもならないことである。これは本職でも予測がなかなか困難であるという。ましてこの種の本が外国で発売されるということは前代未聞のことだったから、講談社インターナショナルの内部でも出すか出さないかということでは最後まで大いにもめたのである。

第一、問題の本と言うのはどんなものであるかというに、東京の人間にとっては日本の中でもっとも後進地として名高い茨城県の小さな町に住む医者が聞き集めた伝聞集であるという。こんなものを国外に紹介するといった冒険を敢えてする必要があるものだろうか、講談社インターナショナルの出版事業の主旨に適合するだろうか、スタッフが大いに頸をかきげたのも当然のことなのである。

しかし、僕に取って実に幸運であったのは、他のスタッフの懐疑的な態度にもかかわらず、ショウさんがこの本の出版意義に関していささかの疑念も抱かなかったことである。彼は、まったく恐るべき自己確信に満ちた頑固者だった。

「この本は、私が17年間日本で編集してきた本の中でもっとも素晴らしい本である。こんなものを欧米の人間は待っていたのだ。だから、必ず売れるに違いない。」ショウさんはスタッフたちにこう言い続けたのだ。

しかし、編集が進んで行く間に世界の経済状態が急速におかしくなり、講談社の企画部や営業部などの意見も厳しくなって、ショウさんは実に困難な時期を過ごさなければなら

なかった。専務取締役も交代した。この時期を乗り切るのは容易なことではなかった。今になって編集部の人々やデザインにたずさわっていた人々がつくづくと僕にこういった。

「ショウさんがとにかく頑固に頑張り続けたからね。あの頑固一徹には誰も負けたよ。」

「MEMORIES OF SILK AND STRAW」という題はガリーと僕が考えたのだが、副題のほうは随分と苦労した。50余りの候補を作り、それをショウさんが検討して、これでいこうというところまできて、アメリカのエージェントのほうから「そんな題では売れない」といったクレームがきて、やり直したりした。

国内でも売るために邦題をつけることになり、これも編集部が総がかりで知恵をだしあったがなかなかいい題が見つからない。僕に最後の案の提出を求められたが、これでは、というものを出したら、そんなのでは駄目だと蹴られて、最後には専務の森さんが「日本のふる里」で行こうと決定した。途中いろいろあったが、ここまできたら、いいものを作ろうと、全体が懸命になっていたのだ。

こうした出来事の末に、「日本のふる里」はとうとう外国の書棚に陳列されることになった。そして、この困難な時期にもかかわらず英訳本が好調に売れているという。これはほんとうに嬉しいことだ。翻訳物は一般に、一流の作者のものでも出版後二年間に売れるのは大体800部程度であるという。国内で短期間に売れたのは、太宰治の「津軽」で、これが1000部であって、これが記録だという。それなら2000部売れないものかしら、僕は相かわらずの誇大な妄想を抱いたのだった。

しかし、その妄想が現実になって、発売後3ヶ月で4000部が出てしまった。アメリカではニューヨークだけでたちまち千部がはけてしまい、外の都市には回らないので、早速

重版することになった。驚くべきことである。

ガリーは世界的な経済雑誌ユーローマネーに就職し、たちまち抜擢されて、日本語版の編集長に就任した。まだ26才である。彼は今世界中を飛び回っている。昨日電話をしたら、ギリシャから帰国したばかりだったという。7月半ばから1ヶ月ばかり日本に来る予定だという。彼が日本に来るときはいつも帝国ホテルか、ホテルオークラである。しかも二週間も連続して泊まるのだから大した変わりようだ。「彼は金持ちになったのだから、僕らはみんな払ってもらおう」などと僕とショウさんは冗談をいう。僕はアメリカで何万部も売れたらロンドンでもニューヨークでも行きたいのだが、奇跡は二度と起こらないということになっているから駄目だろう。しかし、ガリーは「僕は編集長になったら以前より暇ですから、また先生の原稿を翻訳したいんです。いつごろできますか。」と再三言ってくる。そのうち必ずこれはやりたいと思う。ガリーが糸のきれた凧のように飛んで行ってしまううちにやるつもりだ。

(土浦市在住・医師)

### <紹介> 土浦の里

土浦市に住む医師佐賀進、純一さん親子が、7年がかりで絵と聞き書きでつづった戦前の霞ヶ浦周辺の人々の庶民誌。B4判、210頁。

土浦一帯は戦前よく水害に見舞われたため、古い記録や写真がかなり流失、昔をしのぶ資料に乏しい。これを知った佐賀進さんは、20年前から霞ヶ浦の水辺や職人の仕事など昔の風景を思い出し、水彩画として残し始めた。

絵が次々と仕上るのを見た息子、純一さんは、「どうせなら当時のことを正確に伝えたい」と、往診かばんに録音テープを入れ、お年寄りからの聞き書きを始めた。船頭、芸者、

馬車ひきからヤクザまで、61の職業、計82人。大正初期から第2次大戦までの庶民の生活を生き生きと伝える話が集まった。200枚の美しい絵も集録した「土浦の里」は7年前の暮れ、進さんの71回目の誕生日に完成した。

当時、ケンブリッジ大学の日本語学科4年生で、日本の特許事務所で実習中だった英国人、ガリー・エバンスさんが、たまたまこの本を目し「ぜひ英訳して、欧米人の日本に対する理解を深めるテキストに」と3年かけて翻訳を完成させた。(朝日新聞より)

☆ ☆ ☆

### 土浦の佐賀さん父子らサントリー

#### 地域文化賞受賞(1987・6・5)

土浦の歴史、自然を愛する住民のネットワークが認められる。

サントリー文化財団は1987年度のサントリー地域文化賞を発表したが、その中に、土浦在住の医師、佐賀進さん、純一さん父子らを中心とする同市住民らの「ふるさとづくり活動」が選ばれた。戦前の伝統的な風景を絵と伝聞でつづった本の出版を中心に、霞ヶ浦浄化に取り組む「土浦の自然を守る会」の活動などを、団体を特定せずに、広くコミュニティー活動が地域文化に果している功績として表彰するもので、同財団では、「質の高い新しいタイプの地域活動」と高く評価している。

(朝日新聞より)

## MEMORIES OF SILK AND STRAW

A Self-Portrait of  
Small-Town Japan

Dr. Junichi Saga